

学会だより No. 82 2005年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

第63回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第63回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2005年10月23日（日） 10：00～16：45

会場：上智大学7号館14階特別会議室

プログラム

研究発表 10：00～12：00

石井砂母亜（本学博士後期課程）

「インマヌエル」とは何か 滝沢克己のイエス・キリスト理解をめぐって

阿部善彦（本学博士後期課程）

マイスター・エックハルトにおける『今』について

中畑邦夫（本学博士後期課程）

ヘーゲル論理学と言語 ヘーゲル論理学における言語の位置付け

休憩

総会 13：00～13：20

講演 13：25～14：25

長町裕司（本学哲学科助教授）

われわれであるところの存在者の 住まう在り処 と「内 存在」

グローバリゼーションの趨勢に直面してのハイデガー

シンポジウム 14：35～16：45

テーマ：「西田哲学とキリスト教」

提題者：小野寺 功（清泉女子大名誉教授）

前田 保（和光大講師）

阿部仲麻呂（日本カトリック神学会評議員）

司 会：田中 裕（本学哲学科教授）

懇親会 17：00～19：00

会場：ソフィアーズ・クラブ

会費：3,000円

シンポジウム：「西田哲学とキリスト教」

このシンポジウムでは、後期西田哲学で展開された場所的論理に立脚する宗教論がキリスト教に対して持っている意味を、西欧のカトリック神学とプロテスタント神学の伝統にふれながら、三人の発表者の方の視点より、批判的かつ創造的に取り上げて頂きます。

(記：司会 田中 裕(本学哲学学科教授))

*

提題要旨

インマヌエルと三位一体の場所

小野寺 功(清泉女子大名誉教授)

かねてから私は、現代日本の哲学形成の課題は、西田哲学を足場にして、そこから新たな発展をめざすべきであると考えてきた。なぜなら近代日本の哲学・宗教は、西田哲学の中に最深最大の論理的表現を得ており、私が追求している日本のカトリック神学形成の課題でさえ、西田哲学を無視しては、この国に根を下ろすことは難しいと思われるからである。その意味で「西田哲学とキリスト教」の根本問題を考える場合、最も重要で先駆的な業績を残したのは、滝沢克己ではないかと思う。

周知のように、滝沢の本格的な思索の道は、典型的な日本の哲学である西田哲学との出会いから始まる。また留学時には西田の勤めに従いK・バルトを中心にヨーロッパ神学や哲学を深く研究し、東洋と西洋をつなぐ原点を捉え、キリスト教のみならず、日本の仏教界などにも影響をあたえた。この原点としての根本理法は、滝沢の場合端的に、「被造物即創造者」「神即人」と表現されている。そしてこれは西田哲学の「絶対矛盾的自己同一の即の論理」を、バルト神学の「インマヌエル」〔神われらと共にいます〕の思想の中に読みとり、そこから独自の滝沢神人学が生み出されてきたとみることができる。

またイエス・キリストのペルソナの統一性を理解する場合のバルトと滝沢の見解の相違は、バルトの出発点がキリスト論であるのに対し、滝沢の場合は、イエス・キリストを動かす「根源」としての聖霊に出発点があることは、十分注目に値する事柄である。

さらに西田哲学における絶対無の場所的論理は、キリスト教の観点からみれば、明らかに聖霊論的思考の論理に対応しており、ここに「西田哲学とキリスト教」の接点がある。しかし滝沢の場合、先駆者の常としてその原点把握に力点が置かれており、聖霊神学の展開はみられない。この日本の神学の成果を、さらに基礎付け展開するためには、どうしてもインマヌエルを「三位一体の場所」から、より包括的、根源的に捉え直す必要があると思う。私の「絶対無と神 京都学派の哲学」〔春風社〕は、そうした問題意識からの一連の試みであり、この視点から「西田哲学とキリスト教」の諸問題を提起してみたいと考える。

*

西田哲学とキリスト教 滝沢克己を通して

前田 保（和光大講師）

シンポジウムの表題について「滝沢克己」をキーワードに考えてみたい。

滝沢は若くして西田に認められデビュー、戦前、西田哲学を理解した唯一の人物とも言われる。その後ドイツに留学、西田の勧めでプロテスタント神学者カール・バルトに師事・共感、驚異的な能力を示してバルトを理解、バルトもそれを認めた。一方、バルトのキリスト論を批判し、西田哲学を例に出して「教会の外での神認識の可能性」を主張した。帰国後、滝沢は西田論を書くが、それはわが国初のキリスト教からする西田哲学論といわれる。西田はそれにまた高い評価を与えた。

ところがそこには、キリスト教からの厳しい批判も記されており、西田は滝沢宛書簡で自分の思想の不徹底を認める。だが、その後も、西田の理解者である滝沢からキリスト教を学んだと思われる。そして、滝沢からの批判には最晩年の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」で答えたと言われる。その執筆直後に亡くなった西田に対し、滝沢は戦後も一貫して尊敬と批判を維持した。

滝沢の批判は、西田哲学には神と人との関係に「不可逆性」がないというものだった。これに対し、西田は「逆対応」の概念で答えたとされる。この答えに対し滝沢は、それでも「不可逆性」は認識されていないと批判しつづける。ところが滝沢は、他方では、「逆対応」の概念を取り入れもする。

そこで、「不可逆」と「逆対応」の概念的関係を明確にしたい。また神と人との関係といった「宗教」問題がなぜ西田哲学にとって根本問題であるのか、一見キリスト教神学だけに固有な、ごく特殊な話題が哲学にとってそれ程の論点になるのかを考えたい。さらに、二人の確執、とくに滝沢の西田批判の意味を近代日本哲学及び西欧現代思想の展望の中でとらえておきたい。

最後に、表題をめぐって、「仏教・キリスト教と諸宗教」、「哲学と神学」について、今日、わたし達がぜひ学ばなければならないことを提示したい。それは、西田と滝沢が、その共鳴と確執を通して、諸宗教に対する態度の根本的転換を迫り、広義のエキュメニカルな地平と世界平和の原点を示唆、また、哲学と神学という学問論における二項対立にパラダイム転換を迫り、困難な世界における敬虔にして自由かつ厳密で批判的な思惟の出所を示唆していることである。

*

西田哲学解釈の新たな展開可能性

母胎的キリスト教 の提起；聖霊の哲学的説明・如来蔵思想の伏在・つつみつつまれる関係性の追究

阿部仲麻呂（日本カトリック神学会評議員）

今回の提題発表の際に、これまで、充分には展開されてこなかった「母胎的キリスト教」の視点を、ひとまず概説的に提起しておく。そうすることによって、西田哲学の新たな展開可能性の見通しも鮮明になるのではなかろうか。

従来、「西田哲学とキリスト教との関わり」を考察する際には、二つの常套的な接近法が有力だった。ひとつは、カトリックの立場から思索する小野寺功のように「神人の逆対応の現事実を成り立たせる場所的論理」を手がかりとする方法。もうひとつは、プロテスタントの滝沢克己の研究に徹する立場から思索している前田保による「神人論の究明」を手がかりにする方法。

両立場は、神と人間との絶対的乖離即人格的邂逅としての峻厳なる現実を西田哲学を用いることによって「絶対矛盾的自己同一的」に説明するという点において共通の問題意識に裏打ちされている。しかし、神(主語)と人間(述語)との「生の響存的連関背景(繫辞)」(Life-Context)に関しては可能性を示唆するにとどまっており、今一步の踏み込みが不可欠であるはずだろう。

そこで、「生の響存的連関背景」を考察するにあたり、手始めに三つの視点を組み合わせることで「母胎的キリスト教」構築の序説とする。三つの視点とは、次の通り。 聖霊の哲学的説明(キリスト教的側面)、如来蔵思想の伏在(仏教的側面)、つつみつつまれる関係性の追究(共通性としての論理的側面)。

神と人間との邂逅を説明する際に「母の胎に生まれた赤子の安寧な状態への回帰」というイメージを用いるのが「母胎的キリスト教」(ないし「如来蔵思想」ないし「つつみつつまれる関係性」)である。

先に述べた三点は、もちろん、西田哲学テキストにおいて明確な形としては定位されていない。しかし、実に、死が彼の思索を奪いさえしなければ、他ならぬ西田自身が上述の三つの視点を『場所的論理と宗教的世界観』以降の著作活動において描こうとしていたとも言えなくはないのである。

西田が展開し得たであろう視点を予測して描出するための手がかりを示すとすれば、以下のようになるだろう。西田は、「心霊上の事実を哲学的に説明すること」を課題としていた。そして、「ライブニッツ思想や仏教の華嚴思想への関心と如来蔵思想への飽くなき興味」に心奪われていた。さらに、「弟子の務台理作の『場所の論理学』(つつみつつまれる関係性による森羅万象の説明)から受けた影響」によって最後まで触発され続けていた。

講演要旨

われわれであるところの存在者の 住まう在り処 と「内 存在」 グローバリゼーションの趨勢に直面してのハイデガー

長町裕司（本学哲学科助教授）

この度 10 ヶ月余もの期間をいただいて、再度ドイツでの研究滞在を経た私の「思索する心境」といったものに変位が生じた断層が見出せるとしたら、それは、<住まうこととその住まう在り処の究明> に相属して思索の本質が変転現成するところに自己なるものの所在もまた覚醒する、といった「思惟することのエレメント（生息圏）」におけるものである。このような事態は確かに、特定の主導的な学的関心に基づいて或る期間に携わった研究上の主題化の在り方や一定の歴史的連関の中での解釈学的状況の練成に影響呼応してくるものではあろう。他方逆に思索における境位の断層の開けといったものはただ、対話が向かい合う汝なるものとの間の歴史的含蓄の根幹部へと迫り、対決（Auseinandersetzung）へと歩み入ることの兆しとしてしか生じてこない。

さてこの<歩み入り> は勿論、マルティン・ハイデガー（1889 - 1976）の思惟の道を経験しつつ、とりわけその中期から後期前半に至るテキストを改めて丹念に吟味するという営みから開かれてきたものである。そこで本報告の最初の部分は、この「思惟の道の経験」を共に遂行する誘いに当てたい。ここでは、ハイデガーが初期フライブルク時代からマールブルクでの『存在と時間』公刊前後の思考圏を経て、生前未公開だった『哲学への寄与』（1936 - 38）へと「転回の思索」を辿って行く歩みを究明しつつ、自己性（Selbstheit）とは現出において本質現成する（wesen）ところのものにおいて帰属しその躍動幅を有するところのものであることを「内存在（In - Sein）」（中期には、内立性 Inständigkeit）という主導語に即して解き起こす。この動性が《本質化》すると共に「住まう」という人間に固有な営みとその本来の「在り処」へと根源からの由来に「思惟すること」と相属して開顕する、その道の痕跡を続く部分で言述へともたらしたい。但し今回の簡略な報告では、この根本相関における「住まう」ことの全体構造の組成を追反省された組織的論述へ展開することを由とはしない。この局面では幾つかの主導語によって指し示された（sich zeigen）言葉の本質領域からの言述への語りかけが存するのみである。締結部は、グローバリゼーションという時代の特徴的な趨勢に対してハイデガーの「思索の道」から聴取できるメッセージを付加することをもって結びとする意向である。

研究発表要旨

「インマヌエル」とは何か 滝沢克己のイエス・キリスト理解をめぐって

石井砂母亜（本学博士後期課程）

新約聖書の冒頭にある「マタイによる福音書」を開いてみると、我々はすぐにイエス・キリストの誕生物語に出会うだろう。主の御使いがヨセフに語りかける場面である。聖霊によりマリアの胎に宿された子について、夢の中のヨセフに主の御使いはこう語る。「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』。この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」(マタ 1:23)。

これはイエス・キリストが「インマヌエル」(神我らと共にあり)だと告げられる場面であるが、神との関係が墮罪により著しく損なわれたとする聖書の人間理解において、その冒頭から神との和解が示唆される本箇所は、またそれを開示する「インマヌエル」という語は、聖書における最大の救いの使信だと言うことができよう。「インマヌエル」の名がナザレのイエスに附されているということから、「インマヌエル」の成就をナザレのイエスに見る立場がキリスト教において主流である。しかし滝沢克己(1909-1984)は、「インマヌエル」の成就がナザレのイエスにおいて初めてなされた、という見方に疑問を呈する。彼はインマヌエルでなかった神、インマヌエルの事実を離れて存在する人間など存在し得ないと主張するのである。確かに、イエスの誕生において始めてインマヌエルが発生したのであれば、そうでない事態も考えられようが、滝沢はそのような神や人間を非聖書的なものとして批判するのである。滝沢は「インマヌエル」という一語にナザレのイエスをも含み込む普遍性を見ており、キリスト教固有の事態から普遍的な基盤を見出そうとしている。

本発表においては、滝沢が批判する「インマヌエルでなかった神」「インマヌエルの事実を離れて存在する人間」という言葉遣いに着目し、それが非聖書的だと言われるのはなぜか、また逆に彼が強調する「インマヌエルなる神」「インマヌエルにおける人間」が、イエス・キリストをめぐるインマヌエル解釈に如何なる視点を与えたのかについて考察していきたい。その際、テキストとしては彼の初期の論文「処女マリアの胎動」及び「バルト神学になお残るただ一つの疑問」(全集2巻所収)を中心に、後期の論文にもあたりながら、滝沢が「インマヌエル」という用語において何を明らかにし、何を示そうとしたのかを解明していきたい。

*

マイスター・エックハルトにおける『今』について

阿部善彦（本学博士後期課程）

本発表においては、マイスター・エックハルト(1260頃 - 1328)の『今』に関する問題について考えていきたい。一般的には、エックハルトは、スコラ学、またドイツ神秘思想の潮流に位置づけられ、中心的思想として、「魂における神の子の誕生」、「魂の神性への突破」が指摘さ

れる。このようなテーマは、たんに神秘的経験の表現に尽きるものではなく、人間が精神の内的中心たる「根底」に向って徹底的に自己再帰し、一切の对象的認識を超え行き、反省・述言不可能な「単純にして一なる」神を捉え一致し、さらにその際、人間が自己自身と一致し、その存在遂行が同時に、「私自身の原因である」というような自己根源となることを意味するのである。そしてそのような神性(との一致)や、人間の知性・精神的根拠の内実は高度に哲学的・思弁的に展開される。然るに、「今」をめぐる思索は、人間の魂と神の一致の内実を開明する際に、重要な意義を有すると思われる。なぜなら「今」において「魂における神の子の誕生」が成り立ち、「魂の高貴な力」が「神を神の顕わで固有の存在において捉える」ことも、この「今」において成立するからである。然るに本発表ではこのことを踏まえ次の事について特に考察を進める予定である。このような「今」は「現在の今」、そして「永遠の今」として時間的なものと異なるのであり、さらに「今」にわれわれが立つためには時間的なもの一切から離れなければならないとされるが、それは「今」が本来、脱時間化するものなのではなく、むしろ一切の時間を成立させるのであり、一切の時間が「今」のうちに包括されており、われわれは「今」をつかむことにおいて一切の時間をつかむのである。

*

ヘーゲル論理学と言語 ヘーゲル論理学における言語の位置付け

中畑邦夫（本学博士後期課程）

ヘーゲルは『精神現象学』において、「言語」が「精神」の「定在」と述べている。『精神現象学』の文脈において、このことは「分裂の言語」、「良心の言語」を経て「精神の定在としての言語」へ、といった形でいわば言語の深まりとして論じられている。そしてこの「精神の定在としての言語」こそが、ヘーゲル哲学における「精神」が自らをまさに「精神」として認識する場であることが示される。ヘーゲル哲学において、このようなものとしての言語によって表現されるものこそがいわゆる「思弁的命題」であり、またこれによって展開される叙述の在り方こそが「思弁的叙述」と言われるものに他ならない。

さて、この「精神の定在としての言語」という表現は『精神現象学』の文脈を離れてもヘーゲル研究者に様々な関心を引き起こすものであろう。私は主に次の三つの観点からこの表現に関心を抱くものである。第一に、この表現においてヘーゲル哲学に固有の「精神」なるものの根源的な所在が明らかにされている、ということ。第二に、「定在」とはヘーゲル論理学の最初のカテゴリーなのであるから、論理学の展開原理を言語をモデルとして捉える可能性が開かれるのではないかと、ということ。さらに第三に、ヘーゲル論理学をまさに思弁的叙述の展開として捉えることが可能であるとすれば、独特なヘーゲル論理学の中でも通常の意味での「論理学」に最も近い箇所であるとされる「判断論」および「推理論」を、命題がまさに思弁的命題として深まってゆく過程と捉えることも出来るのであり、このことによってヘーゲル論理学の

独自性を明確にすることが可能になるのではないか、ということである。

上記三つの観点に立って、私は主に『大論理学』を手がかりとしてヘーゲルの諸テキストを考察し、その成果として「言語」という観点からヘーゲル論理学成立の場を捉えるための見取り図を示すことを以って、今回の発表とさせていただく予定である。